Report on the Villages in East China (9): The Jiangsu Province Villages in March 2014

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41432

華東農村訪問調査報告(9)

―― 2014年3月，江蘇省の農村 ――

弁　納　才　一

はじめに

今回，江蘇省無錫市の2か所の農村には，初めて広島大学教授の日本農村史研究者である勝部真人氏を案内し，これまでと同様に，聞き取り調査を行った[1]。今回の旅程は，以下のとおりである。

3月24日(月)，中国東方航空で小松空港を定刻より20分遅れて13:50に出発し(搭乗率は7～8割程度か。小松・台北便が満席だったのに比べると，やや少ないか)，上海浦東空港で高速バス乗り場に16:10前に到着し，同バスの出発時刻は16:23と告げられたが，実際は16:25に出発し，終点の上海火車站には17:45に到着した。取り急ぎ，18:00前にホテルでチェック・インしようとしたところ，宿泊の予約を確認できないと言われ(2月5日に予約を入れていたため，予約が早すぎたということらしい)，ややてこずったが，約30分後にはどうにかチェック・インすることができた。いつものように，上海駅で切符を購入して，その近くで夕食を食べたが，同年3月上旬に訪問したばかりの台湾やシンガポール[2]と比べて味がやや濃いように感じた。また，上海駅の正面にあった2軒のレストランはなくなっていた。上海駅前は，以前よりも人が少ない感じがした。

3月25日(火)，勝部真人氏を上海浦東国際空港まで出迎えに行き(11:35に到着する予定だったが，勝部氏によれば，11:05に到着したらしい)，同氏がホテルへのチェック・インを済ませた後，上海図書館で文献資料調査を行った。

26日(水)昼，上海から無錫へ移動し(高速鉄道で42分)，無錫市湖浜区栄巷鎮のもと農村だったところ(楊木橋・小丁巷・許巷・鄭巷)を訪問し，翌27日(木)は終日，無錫市湖浜区胡埭鎮馬鞍村を訪問した。

28日(金)午前，無錫から上海に戻り，午後，上海図書館で文献資料収集を行い，翌29日(土)は勝部氏とともに上海市嘉定区馬陸鎮石崗村を訪問した。

30日(日)朝，勝部氏を上海浦東国際空港まで見送り，昼頃，高速鉄道にて無錫へ移動した。同日午後，再び，栄巷鎮にて聞き取りを行った。

31日(月)午前，高速鉄道にて無錫から南京へ移動し(約1時間を要す)，午後はコマニー南京工場兼事務所を訪問した。

4月1日(火)午前，南京大学歴史系教授の張憲文氏を訪ね，午後，高速鉄道にて南京から上海へ戻った。

2日(水)は，終日，聞き取り調査や資料の整理を行い，翌3日(木)，上海浦東国際空港から小松空港へ移動し，無事に帰国することになった。

なお，本稿においても，前稿までと同様に，主に煩雑さを避けるために，原則として常用漢字と算用数字を用いた。

Ⅰ　聞き取り調査

(1)　無錫市栄巷鎮

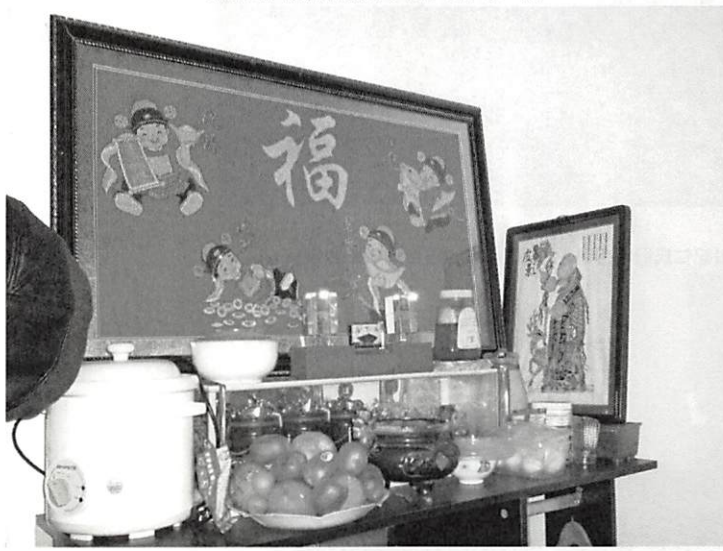
3月26日(水)午後，勝部真人氏とともに，湯可可氏(もと無錫市档案局長・無錫市政治協商委員会委員研究室主任)の案内によって，タクシー(運転手は安徽省出身で，外国人とりわけ日本人は嫌いだとつぶやいていたようである)に乗車して(17元)無錫市浜湖区栄巷街道の栄紀仁氏宅を訪ねた。

前回，2013年9月に栄紀仁氏と連絡がとれなかったのは，仮住まいのマンション(かつての楊木橋にあった)から現在の新しいマンションに転居していたためだったことが判明した(**写真1**を参照)。ただし，その場所は，かつて自宅があった小丁巷ではなく，鄭巷であるという。

また，現在のマンションに転居するに際しては，9階の隣接する2部屋と10階の1部屋の計3部屋を手当され，9階の2部屋を1部屋として拡張して居住し，10階の1部屋はすでに売却して，その売却代金で上海にマンション

写真１．（左側より）勝部・栄紀仁・弁納

写真２．栄紀仁氏のマンションの一室



（誰が住む？）を購入したという。なお，手当された３部屋のうち，居住する１部屋を除く２部屋を賃貸マンションとして家賃収入を得ている家も多いという。そして，部屋の中の一室には祭壇のような場所があり，中国の農村では

よく見かけた(写真２を参照)。特定の宗教が関係しているようには見えない。

そして，話を聞いた後，栄紀仁氏に小丁巷の旧宅があった場所まで案内していただくことになった。その途中で，鄭巷の宋帝廟(写真３を参照)の前を通過し，かつての小丁巷の栄紀仁氏宅があった場所を参観した。そこは，マンションを建設するための基礎工事が行われているところだった(写真４を参照)。なお，地下の１階・２階が駐車場になる予定だという。

写真３．鄭巷の宋帝廟の正門

写真４．栄紀仁氏旧宅の跡地(駐車している自動車の背後)

夕刻，栄巷鎮から無錫のホテルに戻ろうとしたところ，湯可可氏の知人で中国人民政治協商会議無錫市浜湖区委員会秘書長の銭江氏（かつては無錫の江南大学で歴史を教えていたという）が手配したワゴン車が運転手付きで迎えに来ていた。そして，夕食は，一見してやや豪華そうなレストラン（無錫市浜湖区政府幹部の御用達であろうか）において同区政府側の接待を受けることになった。この宴席には，銭江氏以外にも，同区政府の数名の幹部が同席したが，名刺をいただくことができたのは銭江氏と同区委員会学習文史和社会法制委員会主任の孫海龍氏の２人だけだった。そして，今後，学術交流とりわけ著書の寄贈を希望していると告げられたので，次回，無錫を訪問する際には著書を寄贈したい。なお，湯可可氏は，無錫市歴史学会の顧問を務めている関係で，同区政府の幹部らと付き合いがあるようである。

３月30日㈰午前，勝部真人氏を浦東国際飛行場まで送った後，再度，高速鉄道にて無錫へ戻り，午後，栄巷鎮の栄紀仁氏宅を訪問し，同氏の子供たちについて話を聞くことができた。

聞き取り日時：2014年３月30日㈰　16:10～17:10
聞き取り場所：栄紀仁氏宅
聞き取り対象者：栄紀仁
聞　　き　　手：弁納才一・湯可可
通　　訳：周如軍

栄紀仁氏の子供たち

・栄紀仁氏には１人の息子（栄磊毅）と２人の娘（栄雲娟，栄雪娟）がおり，現在，息子夫婦と一緒に暮らしている。
・長男（栄磊毅，1957年・酉年生れ）は，2014年３月現在，栄達汽車運輸公司を経営している（詳細は後述）。その妻（丁建亜，1959年・亥年生れ）は，河埒鎮（現在，河埒街道）大丁村西丁蚕桑隊（水稲を栽培せず，養蚕のみ行っていた）の出身で，父親の栄紀仁氏の紹介によって1983年に結婚した。栄紀仁氏によれば，西丁村は貧しい農村で，丁建亜を知ることになった経緯は以下のとおりである。栄紀仁氏は，1980～81年，太湖機械

廠で建設科長をやっていたが(1986年,「后勤部」),西丁蚕桑隊の隊長夫人(王秀珍)が太湖機械廠で土地をならして塀の基礎を掘るのを手伝わせようとして一群の人を連れてきたが,その大多数が女子で,その中に丁建亜がいた。また,当時,西丁蚕桑隊長の周冠群の息子が河埒運輸公司でトラックの運転手をやっていた。「繅糸一廠」は「高档A級」の生糸を繰り出すための技術指導をするために,数十人の労働者を河埒に呼び寄せた。西丁蚕桑隊には30～50畝の桑畑があり,男性はみな村外に出稼ぎに出ており,農村に留まっていたのは全て専業主婦で,丁建亜の父親は,上海羊毛衫十二廠で工会(労働組合)の主席をやっていた。

・長男の息子(栄嶸)は,大学を卒業した後,2003年に錦安汽車運輸公司を起こし,現在も経営している。同公司は,2010年に錫澄路から胡埭鎮に移転した。これは,無錫市政府の政策によって,工場などを市街地から農村部(重工業は胡埭工業園区,軽工業は東亭)へ移転させる動きに合わせたものである。当初は60台余りのトラックを保有していたが,経営を拡大し,2011年には栄達汽車運輸公司を起こし(2014年現在,60～70台のトラックを保有),父親の栄磊毅(栄紀仁氏の長男)が経営している。錦安公司は5～10ﾄﾝトラックを保有して安徽省へ進出し,一方,栄達公司は20～30ﾄﾝトラックを保有し,江蘇省を主要な市場としている(ばら積みのセメントなど,かさばって重い荷物を運んでいた)。栄嶸は2008年に結婚したが,その妻(傅春霞,上海出身)は,留学のための「語言培訓学校」で職員をやっている。

・長女(栄雲娟,1959年・亥年生れ)の夫(管介元,1955年・未年生れ)は,錫山大隊(管巷)の出身で,無錫市五愛路にあった五洲商場の「舗面経理」(店舗の責任者)として働いていたが,1987年(?)に五洲商場が倒産した後,「新世界百貨」(中山路の三鳳橋の近くにあるデパート)に招聘されて「物資保管」になったが,2008年に病気になって家におり,2012年にはそのデパートも営業不振で倒産した。

・長女(栄雲娟)は,文化大革命のために小学校では4年間しか勉強することができなかったものの,よく努力して頑張ってきた。もともと,「水処理設備廠」(錫山大隊の村営工場)で働いていたが,1993年に閉鎖される

と，副廠長の範大新が青山湾(管巷も含む)の傍らに「管閥門市部」(栄紀仁氏が1995年に退職した後に3年間，出納の会計をやってあげたことがあったので，範大新自身が工場を開設するように建議したことがあった)を開設し，七四二廠水站の技術者だった朱弘と合弁で浄水廠を設立したので，長女(栄雲娟)もそこで働くことになった。

・長女(栄雲娟)の息子(管雷)は，高校を卒業した後，入隊したが，2009年には復員して，三鳳橋肉庄で働いたが，2011年からは「調到河埒街道綜合執行隊(城市管理)信訪組」で働いている。ただし，公務員ではないという(詳細については，今後，確認する必要がある)。その息子は，現在，7歳になった。

・次女(栄雪娟，栄巷医院に勤務)については，時間も晩くなったので，次回，詳しい話を聞くことにした。

(2)　無錫市胡埭鎮馬鞍村

3月27日(木)，9時にホテルのロビーに集合し，ホテルの前でタクシーに乗車して馬鞍村に向かい，40分ほどでいつも聞き取りを行っている無錫琳達織造有限公司に到着した(タクシー代は70元余り)。そして，すでに呉文勉・王望栄・王少生の3人が待っていた。同公司の後ろ側は前回訪問した時にすでに高層ビルが林立していたが，今回は，同公司の正面にも高層ビルが建設され始めていた(**写真5**)。

午前中は主に王望栄氏の子供たちの話を聞いて，昼食は，前回までと同様に，同工場の食堂で御馳走になった。午後は，主に王少生氏に話を聞くとともに，呉文勉に胡埭鎮一帯に関する諸状況について話を聞いた後，車で馬鞍村のうち後呉巷・前呉巷・荘橋頭の3ヶ村を参観した。

帰りは，胡埭鎮まで同工場の車で送ってもらったが，そこには正規のタクシーがないので，いわゆる白タクに乗車し，80元を要した。前回は，白タクの古びたワンボックスカーのような車が数台停留していたが，今回は，そのような車は1台も見当たらず，やや高級で小奇麗な乗用車が数台(全て白タク)停留していた。

写真5．無錫琳達織造有限公司周辺のビル建設(同公司3階会議室の窓より)

聞き取り日時：2014年3月27日(木)　9:50～11:50，12:40～15:40
聞き取り場所：無錫琳達織造有限公司3階会議室
聞き取り対象者：呉文勉・王望栄・王少生
聞　き　手：弁納才一・勝部真人・湯可可
通　　訳：周如軍

王望栄氏の子供たち

・6人の息子と3人の娘がおり，その子供たちも含めて，現在，子供たちの自動車の保有数は全部で60台くらいとなっている。

・長男(王根松，午年生まれ，73歳)は，自動車の修理工場を経営しており，本来はその息子(王文建，郷の運輸管理機関の幹部だった)に経営を譲って任せるつもりだったが，事故に逢って植物人間状態になって入院しているので，その1人娘(24歳，大学卒業後，無錫市の新区にある韓国の企業で働いていた)が，会社を辞めて面倒を見ている。長男の妻(顧榴娣，武進県錫堰橋の出身)は，王望栄氏の妻の姉の娘で，実家は葡萄を栽培

する農家だった。長男の息子(王文建)の妻(秦国琴，48～49歳？)は，胡埭鎮河西村(後に富安村と改称)の出身で，王望栄氏の妹(王菊妹，河西村に嫁した)の紹介(仲人)によって知り合った。なお，長男(王根松)の一家は，他に所有する店舗を賃貸に出しているので，家計はかなり裕福である。

・次男(王興松，酉年生れ，69歳)は，もともとは建設機械製造工場を経営していたが，すでに退職した。次男の妻(堵梅，胡埭鎮張舎村堵家岸村の出身)の実家は農家で，長男(王根松)と妻(堵梅)の兄が同じ造船工場で働いていたことから，紹介された。ちなみに，王望栄氏の母親(堵三大)は馬鞍村蔡巷の出身で，次男の妻(堵梅)やその出身地の堵家岸村とは全く関係がない。次男(王興松)には2人の息子がいる。その長男(王文偉)は約200人の労働者を抱えるショベルカー(建設機械？)製造工場を経営し(父親の王興松の工場を引き継いだのか？)，同時に，除湿機製造工場(70～80人の労働者を擁する)も経営していたが，現在はその経営を娘に任せており，その妻(呉秋紅，張舎の出身)とは恋愛結婚だった。一方，王興松の次男(王文立)は40～50人の労働者を擁する「配件廠」(機会部品工場)を経営し，その妻(王小紅)は張舎の出身である。

・三男(王恵松，辰年生れ，63歳)は，呉允熊(党委書記)の紹介(仲人)で銭家に婿入りした。王恵松とその妻(銭桂珍，実家は無錫県東部の鴻声村の農家)は蚕桑専門科学校(解放前は開弦弓村の女子蚕校)のクラスメートだった。その妻(銭桂珍)は，蚕桑専門科学校を卒業した後，七房橋村にある銭偉長(物理学者)の邸宅にある小学校の教員になった。一方，三男(王恵松)はもともとは交通銀行の管轄下にあった太平洋保険公司の無錫分公司(支店)の総経理(支店長)を昨年退職した。一人っ子の息子(銭斌)は，無錫県蕩口鎮の鎮長をやっていたが，現在は同鎮の書記を務めており，その妻(呉東梅)は馬鞍村後呉巷の出身で，恋愛結婚だった。

・四男(王亜松，61歳)は，最初は建築関係の仕事をした後，「修配廠」(機械整備工場)を経営し，さらに「繊維板廠」(木屑を建材用の板に作る工場)を経営し，その経営規模を拡大するために，銀行から2,000万元を借りたが，知人が200万元だけを残して1,800万元を持ち逃げしたため，工

場経営は破綻し，自らも罪を問われて(200万元を受け取ったという理由で)8ヶ月の懲役刑に処された。出所後，面子を失って地元にいられなくなり，浙江省慈溪で「老虎灶」(湯を専門に売る店)を経営してお湯を売っていたが，たまたま王文偉(王望栄の次男の息子)に姿を見られて，みじめな生活ぶりに同情されて無錫に連れ戻された。その後，建築関係の仕事をし，30畝の土地(元々は水田だったが，国営のセメント工場用地として買収されたものの，工場建設が中断して放置されていた土地)を借りて葡萄を栽培した。やがて，この土地がマンション建設用地として買収されると，「青苗賠損」(収穫ができなくなることに対する損害賠償金)として85万元を手に入れた。その後，武進県の山地(荒れ地，生産大隊の所有地)を年間5万元の賃貸料を支払って借りて梅を栽培した。5年後，梅の実が収穫できるようになると，土地の賃貸料は割増された。梅の収穫期の十数日間は約20人を1日100元余りで雇っていた(退職した王興松が梅の収穫作業を手伝いに来ていた時にバイクと衝突して大怪我をしたという)。昨年は，梅の販売だけで20万元を売り上げた。同時に，茶畑を借りて茶も栽培した。さらに，400頭の山羊(食肉用として販売)も飼育していた。王亜松の先妻とは「繊維板廠」が経営破綻した時に離婚し，紹介によって結婚した後妻(汪姓で名前は不詳)は安徽省の出身だった。先妻との間には2人の息子がいた。長男(王文峰)は「麦徳隆」超市(スーパーマーケット)で「供銷員」をやっており，次男(王文波)はその妻とともに江南大学で教員をやっている。

・五男(王元松，60歳)は，6台のショベルカーを所有し，土木建築の会社を経営しており，その息子は大学を卒業した後，父親の仕事を手伝っている。

・六男(王仁松，58歳)は，アメリカ資本との合弁会社である浄化設備廠を経営していたが，その後，アメリカ側に経営権を売却して(売却代金8,000万元)，その工場で仕事をしている(年報52万元)。また，その売却代金でニュージーランドで不動産事業(マンションを購入して賃貸に出した)を展開した。現在，その息子(王文洋)は，ニュージーランドの銀行で仕事をしているが，その子供は無錫の学校で勉強しており，母親である妻

はしばしば無錫に帰ってきている。

・長女(王雪芬，70歳)は，馬鞍村張巷の張根寿(70歳，「建築工程師」をやっていた)に嫁し，その息子(張小明，45歳くらい)も建築関係の仕事をしている。

・次女(王雪琴，56歳)は，かつては工場に勤めていたが，現在は「王文列」の工場で雑務をしている。夫(倪志奇，56～57歳)は東亭(錫山市政府所在地)の出身で，もともとは建築関係の仕事をしていたが，現在はレストランでシェフをしている。

・三女(王雪萍，53歳)は，王文立が経営している「配件廠」で経理の仕事をしており，その夫(沈建峰)は富安村小湖山村の出身で，「建築工程師」をやっている。

王少生氏の子供たち

・長男(王建仁，58歳)は，「板銲廠」(溶接工場)を経営している。妻(銭亜芬，59歳)は，雪堰橋の出身である。また，その息子(王黎明)は，もともと日中合弁の「茂泰門窓廠」(無錫出身で，中国側の責任者と知り合いになって紹介された。無錫市の恵山の北部にある山北黄郷街)で働いていたが，現在は父親が経営する「板銲廠」を手伝っている。その妻(辺小恵)は，張舎村劉塘橋の出身である。

・次男(王建亮，51歳)は，「鋳鋼廠」(鋳鋼工場)で「供銷員」(販売員)をやっている。その妻(殷玉芬)は，胡埭鎮東部の富安村の出身である。その息子(王殷明，兎年生れ，27歳)は，胡埭鎮に住み，車で聯通公司に通勤し，防犯用設備の取り付けの仕事をしている。その妻(王蘭，胡埭鎮出身)は，大学の同級生で，胡埭鎮の電信公司で営業の仕事をしている。

・長女(王徐苹，53歳)は，紹介によって，前呉巷の王振華(呉文勉氏の兄の息子で，すでに死去)に嫁した。その息子(王醒元，寅年生まれ)は29歳になった。詳細については，今後，改めて聞く必要がある。

栽培作物の変化

・胡埭鎮一帯では，かつて水蜜桃の栽培が盛んだったが，誤った政策に

よって水蜜桃の木を切ってしまったので，伐採せずに残った洋山の水蜜桃が有名になった。そして，1990年代，日本の巨峰が取り入れられてから葡萄の栽培が盛んになった。もともと，胡埭鎮一帯は水稲作地帯だったので，水稲作地の一部に水蜜桃が植えられたが，再度，水稲作地にもどり，さらに，一部に葡萄が植えられた(かつて日系企業のテラソーを訪問した時に，上海市嘉定区馬陸鎮一帯の農村においても葡萄の栽培が盛んだったという話を聞いたことがある[3])。

村の共同性について

・勝部氏が，日本の伝統的な村落との比較的観点から，水をめぐる争いやその調整などのようなことはなかったのかと尋ねたところ，胡埭鎮一帯は水が豊富なので，水をめぐって争うことはなかったし，また，節場(廟会)を仕切るような人物や組織は特には存在しなかったという。

・廟会のための費用，例えば，劇団を呼ぶ費用は劇団を呼ぶ村が村民から募金という形式で徴収した。

・雨乞いの時の廟会では，御神体の「青面大老爺」(胡埭鎮内の農村の青面大老爺殿に安置されている)を担いで胡埭鎮一帯の村々の中を練り歩いた。呉文勉氏も，1950年に家の前を練り歩いているのを1度見たことがあるという(練り歩くコースは語り伝えられて決まっていたという)。なお，青面大老爺殿は張巡(唐代に安史の乱が発生して社会が混乱した時に民衆を救済した人物で，「青面」はその人物のあだ名だったという)を祀っているのだという。

・雨乞いなどの儀式を仕切るのは，「有名望的人」(名望家)であり，それは当該地域の富裕層(富豪)であり，解放前，最も著名だったのは胡埭鎮に居住していた謝阿錫・謝錫芳の兄弟(日本軍が謝錫芳を胡埭鎮の鎮長にして傀儡化を目指したが，謝錫芳は日本軍に協力しなかったために殺害された)である。

村とその周辺

・1950年，2畝の山地を開墾すると，1畝の平地を分配されたので，盛ん

に山地の開墾が進められた。

・2014年３月現在，胡埭鎮では，北部の村落はすでに数年前に完全に消滅し，南部のうちのほんの一部の村落（後呉巷・前呉巷・荘橋頭・許巷など）が残っているが，居住しているのは老人ばかりである。なお，前呉巷の呉文勉の旧宅はこれまで何度も訪問させていただいたが，数年前から実際には誰も住んでいない空き家となっている。これらの村の周りは高層マンションが立ち並んでいる（写真６・写真７を参照）。そして，蔡村（以前参観した際には，家が取り壊されて更地になっていた[4]）の名残というでも言うべき蔡村橋がある（写真８を参照）。これらのマンションには，かつての農民が居住してだけでなく，この地域（工業区）に外地（内陸部の農村）から働きに来ている家族も居住しているという。

写真６．蔡村橋から見た旧蔡村の現況（ビル群の背後に後呉巷などがある）

写真7．蔡村橋のすぐ側に残っている旧蔡村橋からの眺め

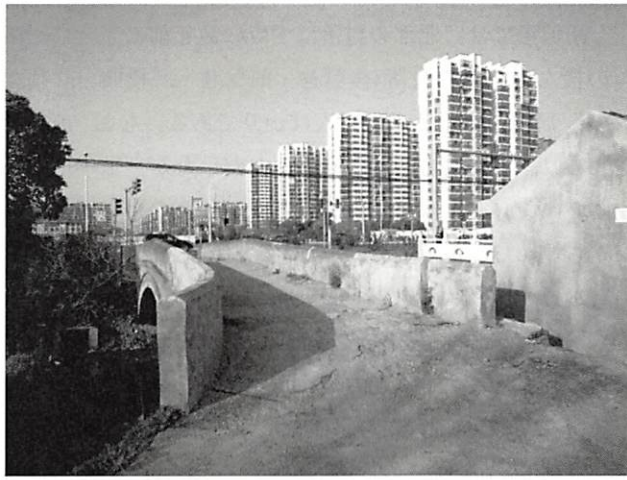


写真8．蔡村橋と河川の両岸

・呉文勉氏によると，地方政府の開発資金が不足してしまったために，たまたま後呉巷などの一部の村落が残っているのだという。よって，これらの村落が消滅するのも時間の問題であろう。

II　訪問地

⑴　上海図書館

３月25日㈫午後は上海図書館（閲覧カードは延長手続きをすると，手数料は不要で，永久使用可能になっていた）で資料収集したが，借り出したマイクロフィルム資料（『合作通訊』）は３階でUSBメモリに複写することができた（費用は，１枚につき，Ａ４は1.4元，Ａ３は2.8元。他に，資料費（手数料？）として１枚につき１元）。また，図書館内の食堂は食券の代わりにプリペード・カードを使用していた。

なお，上海図書館に近い繁華街の淮海中路もやや閑散としていた。外地から上海への流入人口が減少しているのだろうか。

翌26日㈬９：00に上海図書館に入館し，前日の続きのマイクロフィルム資料の複写を依頼した。そして，28日㈮昼に無錫から上海に戻って，上海図書館に行ってみると，複写の作業は完成しており，情報を入手することができた。

写真９．東方楽器博物館の看板（右側）

地下鉄１号線衡山路站で下車し，上海図書館に行く途中，高安路沿いに東方楽器博物館の看板があり（写真９を参照），その路地を少し奥に入ったところに栄徳生（無錫市栄巷鎮出身の大資本家）の旧居があった（写真２・写真３

を参照)。

写真10. 栄徳生旧居の正門

写真11. 栄徳生の旧居

(2) 上海市嘉定区石崗村

29日(土)9:00，勝部真人氏とホテルを出発して上海駅近くの始発停留所で9:24発のバス(滬唐専線)に乗車して，10:10頃に南翔鎮古猗園に到着し，古猗園に隣接するレストランで南翔小籠包を食べた。

その後，11:00頃に再びバスに30分ほど乗車して希望路(前回のバス停名は希望城)で下車し，石崗村の跡地を参観した。当日は，あいにくの雨で足元が悪かったが，逆に，土埃が立つことはなかった。自然公園として整備されていたところ以外は，完全に更地になっており，幹線道路が作られ始めていたが，建物の建設基礎工事などはまだ全く見られなかった。

上海への帰途は，12:30頃に石崗村(このバス停では滬唐専線のバスは停車しない)で北嘉線のバスに乗車して(上海駅には行かないので)祁連山路で地下鉄11号線に乗り換えた。

(3) 南京

31日(月)午前，無錫から南京へ移動し，14:00にコマニー南京事務所兼工場を訪問し，総経理の沢田直樹氏と歓談した。宿泊したホテルから同事務所までは地下鉄を利用したが，以前よりかなり混雑していた。これは，同事務所がある南京市江寧区(かつては江寧県で農村部だった)にもかなりのマンションなどが建設されていることから，居住者が急速に増加したにも原因があるのだろうか。

まず，今回，最も心配していた，今年3月上旬における南京の空気(大気汚染)の状況については，3月31日現在とほぼ同じ程度だということであった。ホテルの窓から見ると，遠くのビルがやや霞んでいる程度で(上海や無錫もほぼ同様)，それほど深刻な状況ではないように感じられた。1週間程度の滞在ではあれば，直ちに健康に影響を及ぼすほどではないと思われる。

また，南京コマニーの事務所機能は，現在の最寄りの地下鉄の駅(竹山路站)よりも1つ手前の駅(小龍湾站)の近くに移転し，工場は溧水にあることから，かりに2015年3月に学生を引率して訪問する際には，まず事務所の方へ訪問して，マイクロバスで溧水へ移動して工場見学という段取りになるだろうということだった(今後，最終的な打合せは村中氏と行うことになった)。

なお，2時間半にも及んだ今回の沢田氏との歓談においても，大部分の時間は直近の中国の社会経済及び政治状況に関する意見交換や沢田氏の意欲的な経営姿勢を御教示いただくのに費やされ，非常に有意義な時間を過ごすことができた。最近の日中関係の緊張・悪化が南京コマニーの企業活動にほとんど影響がないという点はやや意外な感じがした。また，この3月上旬に台湾・シンガポール・マレーシアを訪問することにした経緯を説明したところ，コマニーもシンガポールやマレーシアへの進出には関心を持っているところだというお話を聞かせていただいた。いずれにせよ，御多忙中にもかかわらず，今回も，応対していただき，この場を借りて，改めて感謝の意を表したい。

そして，4月1日㈫9:30，南京大学歴史系教授の張憲文氏を訪ねた。現在，長男は上海の空気清浄機会社で働いており（上海に事務所があり，南京に製造工場があるという），次男は香港で働いているという。近年，日中関係が悪化しているために，日本の研究者との学術交流が以前ほど盛んではなくなってしまったと嘆いていた。

おわりに

無錫市の地下鉄は，1号線が2014年5月か6月には開通し，2号線が同年12月に開通する予定だという（以前はともに2014年12月に完成すると聞いていた）。

上海駅で無錫行きの切符を購入したが，上海駅周辺は以前ほど人が多くないような印象を受けた。なお，前日と同様に，上海駅周辺の店舗で鉄道の時刻表を探したが，購入することができなかった（時刻表を買う人が少ないからだろうか）。そして，結局，今回は，上海・無錫・南京のどこでも時刻表を購入することができなかった。

今回も，無錫では湯可可氏にいろいろとご協力いただいて無事に聞き取りを行うことができた。これまで，無錫では，無錫市街地にやや近い栄巷鎮の農村（小丁巷）と同市街地からかなり離れた胡埭鎮の農村（馬鞍村）の2か所で聞き取り調査を行ってきたが，両地域の農村が都市化する中で，今回，ようやく両地域の関係性が見えてきた。すなわち，2014年12月に地下鉄が開通す

る栄巷鎮の農村は無錫市のベッドタウンと化しつつあり，一方，胡埭鎮の農村は工業区(製造業基地)へと変貌しつつある。

現在，無錫のタクシーの運転手には安徽省出身者が非常に多いという印象を受けた。我々が無錫で利用したタクシーの運転手はほとんど安徽省出身者だった。

なお，習近平政権による贅沢な宴会を禁じる通達を受けて，これまで無錫市政府の幹部の宴会場として利用されてきた鴻運大酒店が倒産したという。

注

1) 筆者がこれまで華東農村において行ってきた聞き取り調査については，拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号，2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号，2009年3月)・同「華東農村訪問調査報告(3)－2009年3月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号，2009年12月)・同「華東農村訪問調査報告(4)－2010年2月・3月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号，2010年12月)・同「華東農村訪問調査報告(5)－2010年12月，江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号，2011年12月)・同「華東農村訪問調査報告(6)－2011年11月，江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号，2012年3月)・同「華東農村訪問調査報告(7)－2012年3月，江蘇省の農村」(『北陸史学』第60号，2013年2月)・同「華東農村訪問調査報告(8)－2013年9月，江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第34巻第2号，2014年3月)を参照されたい。

2) 拙稿(古泉達矢氏との共著)「海外における日系企業等への訪問記録－2014年3月」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号，2014年12月)を参照されたい。

3) 拙稿「華東地域における日系企業の現況－2009年9月－」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号，2009年12月)351頁を参照されたい。

4) 拙稿「華東農村訪問調査報告(6)－2011年11月，江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号，2012年3月)196頁を参照されたい。